

「東京新聞」は2015年から、市井の人が詠んだ平和を求める句を、俳人の金子兜太氏と作家のいとうせいこう氏を選者にして、「平和の俳句」を連載するようになった。金子氏が体調を壊してから、俳人の黒田杏子氏が選者になり、毎年「平和の俳句」は続いている。詠む人も読者も多くなり、待ち焦がれる紙面になっている。今年も、8月1日から一句ずつ紹介された「平和の俳句」を15日に、まとめて掲載している。いとう、黒田両氏が選んだ句から、紹介したい。今年も、ロシアのウクライナ侵攻に心を痛めた句が多い。

「銃を捨てまいて下さいヒマワリを 笹野節子（87）千葉県白井市」ヒマワリはウクライナの国花である。ウクライナの女性が銃を持つロシア兵に対し、「あなたが死んだ時にひまわりの花が咲くように」とポケットにヒマワリの種を入れるように訴えたというニュースが世界に伝えられた。女性の平和を求める願望が痛いように表されている。ソフィア・ローレンとマストロヤンニ主演で、美しいひまわり畑を背景に、愛する夫婦が戦争によって引き裂かれる「ひまわり」という映画があった。「ウクライナ沖縄母の空襲メモ 篠田守弘（83）東京都町田市」連日のようにウクライナへの爆撃の様子が伝えられている。沖縄への艦砲射撃、地上戦での砲撃が重なって見える人は多いだろう。母の痛みはどれほどのものか。「ノーモア ヒロシマ ナガサキ ウクライナ 富田清継（75）名古屋市港区」広島、長崎の被爆に加え、ウクライナの悲劇をも「ノー」と叫んでいる。

「爆死し友十四歳われ卒寿 小原百代（90）福井市」14歳で愛する友は爆死し、生き残った私は卒寿を迎えた。年を重ねる毎に、爆死した友のことを思う。「泣いて語りつぐ子や慰霊の日 堀口勝一郎（80）石川県小松市」戦争の実態を語り継ぐ人が少なくなった。半面、今まで言えなかったが、言い残したいと語り始めた人もいる。聞く耳を持つこと、そして、聞いたことを伝える口を持ちたいと思う。「ガダルカナル語らぬ酒乱敗戦忌 関口実（75）相模原市南区」ガダルカナルの激戦をかいくぐって帰国した。しかし、経験した恐怖は言葉にならず、酒を飲み、酒乱になる。トラウマから抜け出せないのである。

「日本憲法守るほかなし世の平和 近吉三男（106）石川県白山市」最高齢者の句である。憲法9条の戦争放棄と武器の不所持が世界の平和を創ると詠む。主イエスは「剣を取る者は皆、剣で滅びる」と言われた。アフガニスタンで渴いた大地に水を引き込み、緑の野に変えた中村哲氏は、自衛隊の派遣は「百害あって一利なし」と言った。高齢者の句が多いが、「ハッシュタグNo Warツイート広げよう 佐藤終我（13）岐阜県川辺町」若い人たちの間に、No Warの声が広がることを期待する。

「東京新聞」が選んだ20句も紹介されている。「向日葵の世界に響く悲鳴かな 山本正浩（83）石川県内濃町」ウクライナの向日葵畑には悲鳴が上がっている。「慟哭（な）き歩むはぐれし男（お）の子今如何に 鷺谷政康（73）東京都東大和市」親を見失い、一人になった子どもが悲しみと恐怖に慟哭している。映像で見たあの子はどうなったのかと心配でならない。「軍服のパパから離れぬ児の明日は 村松初江（79）静岡県磐田市」軍服を着たパパは今から戦場に向かう。子どもは泣いて、行くなとしがみつく。男性は銃弾をかいくぐって戦争するが、女性と子どもは、その背後で悲しみを背負い込む。「青麦の果てぬ大地や武器いらぬ 山田慎一（38）東京都稲城市」「『戦争』が辞書から消えた夢を見た 榊原健之（74）浜松市北区」憲法9条が世界に普及した日である。この日を夢見て、平和実現を、8月15日だけでなく、不断に叫び続けていきたい。